誌上講習

兒童心理學（第七講）

牛島義友

劣等感

子供の感情生活の中で最も力強く作用し、子供の性格の基礎となるものは劣等感である。人間の根本的な要求は何であらうかと考へる事は相當興味ある問題で或は食慾を或は性慾を最も強い要求とし、フロイドの精神分析は性慾を第一として考察してをるものである。併し吾々の日常生活を反省しても、又小兒の生活を見ても性慾を第一義にする事は納得出來ない節が澤山ある。それでアドラーは力に對する要求、人の上に立ちたい、人に負けたくないとの要求が根源的なものだと言つた。人の上に立つ、偉くなると言ふ考へ方は今日感心出來ない態度だと言はれるけれども、斯かる要求が各人の心の奥に強く働いてをる事は否定出來ない。何も立身しなくてもよいが、矢張り自分の仕事が第一流の事業や研究になる事を望み、自分の子供は偉くなる事を、自分自身も他人とちがつた特色のある者になる事を望む要求は誰の心にも強いものと言へよう。而して斯かる要求は年少の者程強く、修養の積んだ人或は諦め切る樣になつた大人には弱くなるであらう。この要求が凡ての心に滿足されて居るならば問題はないが、併し殆んど凡ての人にとつてこの要求は滿されてゐない。或人は健康に惠まれず、或人は經濟的に苦しみ、或人は智能に惠まれないであらう。又外部から見れば三拍子揃つた樣な人でも、當人になればより惠まれた人と比較して尙ほ不滿を持つて居るであらう。斯かる他人に比して自分が劣つて居るとの感じを劣等感と言ふ。

子供の場合、この劣等感が特に強いものとなつてをり、而も其劣等感の原因は主に身體的なものである。子供の遊びの生活では未だ金力も智力も餘りものを言はず、一番大切なものは體力である。誰よりも強い體力、誰よりも早い走る力、誰よりも上手にやれる器用さ、が一番ものを言ふので、この點に惠まれない子供は遊び仲間では何時も敗殘

者になつてしまふ。體が小さいとか病身である事が既に大きな劣等感の原因になる。更に體が不具である樣な場合は劣等感は最大となる。不具は子供にとつては最も不幸な事である。少し大きな子供になると頭がよくない事、顏が不器量だとか、髮の毛の色が赤いとかちゞれてる事も原因になり、又家が貧困である、親がゐない等の社會經濟的なものも原因となる。

斯かる劣等感を持つた子供は何よりも先づこの缺點をかくさうと努力する。出來るなら自分でも忘れてしまひ度いが、そんな事は出來ず、何かにつけてこの點が意識される。故に斯かる子供に對して其缺點を衝く事は致命的なものとなる。親切な先生もこの爲に信頼を失つてしまふし、友達からこの點を衝かれると興奮し、とめどもなく憤慨してしまふ。先づ斯かる劣等感を持つた人の共通の性質を眺めてみよう。

1、批評に敏感　自己の弱點を批判される事は言ふまでもなく、一般に批評される事を厭やがる。親切な注意も斯かる子供に對しては餘程心してなされねばならぬ。

2、關係妄想　凡ての批評が皆自分に關係ある樣に思つてしまふ。他人の事を言つて居ても自分に對して諷してるのではないかと思つたり、通りがゝりにふと耳にした樣な噂でも自分に關係があるのではないかと思つてしまふ。

3、排他的　斯かる人は他の人を容易に自分の世界に招じ入れない、斯かる人は人から離れて自分一人でをる時が最も安全感を感ずる。人と交つたり、話をする事も苦痛である。道を歩いてゐて、遠方に知人の姿を見るとふと脇道にそれたりする。

4、おだてられ易い　內心に自信がないので少しほめられたり、詔はれると直ぐ好い氣になつてしまふ點もある。

5、競爭を避ける　彼は負ける事にこり〳〵してをる。勝てぬと判つてをる勝負には一切手を出さない、唯勝つ見込のある時にしか競爭しない。一般に斯かる人は何か一つ得意なものを持つてゐて、それだけで競爭しようとする。

6、他人を誹謗する　困つた事ではあるが、他人の失敗を見ると自分の劣等感が救はれた樣な氣がする。それで他人の不幸を喜んだり相手に少し缺點があると、ひどく誹謗したりする。

以上の諸性質は一言で言へばひねくれた性質であるが、斯く素直でなくひねくれたり、ひがんでをる事が主な特徵である。

この劣等感が原因になつて「困つた子供」になる場合も屢々ある。斯かるひがみ切つて小さくなつてをる事は彼等には決して愉快な事でないのは言ふまでもない、從がつて何かの隙間を見付けては大いに鬱憤を晴し度い要求にかられ

かる劣等感から奮起した特殊な努力、補償作用が大きな働きをもつてをるとも考へられる。

下の子供とばかり遊んだり、女の子をいじめて強がつてみたりする。或は家庭の中で強がる內辨慶にもなる。或は更に反抗的になり惡意のいたずらをするとか、嘘言や窃盜をする樣な事もある。極端な場合は平常の抑壓をはね除けて大それた惡事、放火等をやつてしまふ事もある。斯く數へ立てると劣等感は如何にも困つた事になるが、併し劣等感があると必ず子供は駄目になつてしまふ譯ではない。劣等感が無くて順調に成長出來れば幸であるが、劣等感があれば、又之が性格錬成の槌となつて子供を強く育て上げる原因にもなる。

劣等感のある者は如何にもひがんではをるが、併し反撥心も又旺盛である。何時までも小さくなつてをる事は人間の本能が許さない、何とかして盛り返さうとの努力は又人一倍強いのである。自己の弱點を補強し、補償しやうとする努力が現れて來る。以下劣等感に基いた色々な作用について說明してゆかう。

補償作用　劣等感のある者は、其弱點となる部分を特に努力して補強しようとする。體の弱い者は其體を特に鍛錬する。吃り吃りと言はれるのが口惜しくて、一人で海岸に行き吃らぬ樣に口に砂を入れて辯舌の稽古をし、遂に大雄辯家になつたと言ふローマのデモステネスの話は有名だし、耳が遠くなつた爲に音樂家としての生命に絕望した筈のベートーヴェンが聾になつてから却つて優れた作曲をしてをるなどはよい例である。併し何時も斯かる樣に巧くゆくとは限らず、全く氣の毒な場合もある。或る十六になる子供、彼は三度も續けて落第する位の劣等生で、智能指數は七十五しかない。併し教室に於ける彼の學習振りを見る人は彼が劣等生である事に氣付く事は出來ないと思はれる。卽ち彼は時間中一心に勉强し先生の質問に應じて第一に手を擧げるのは彼である。但し其答は何時も誤つては居るが。又教室外でも常に忙しさうにしてゐて勉强家らしい風をしてゐる。卽ち彼は勉强が出來ないと思ふ事を現はすまいとして懸命の努力を拂つてをるのである。

斯かる缺陷のある點に於て補强する事よりも、他の點に於て補償する事の方が容易であり、又普通に行はれる。例へば體力ではこうていかなはないとなると勉强の方で代償を得ようとする者が多い。一般に體の小さいちびと言はれる者から優等生が澤山出る。又女の子の學校の成績が良いのも、男の子から體力でいぢめられてゐる代償とも考へられる。ロンブローゾは「天才と狂氣」と言ふ書に天才の中には不具者や吃音者や病弱者が澤山ゐる事を述べてゐるが、斯かる偉人天才が出來上るには唯素質が優秀だけでなく、斯

る。自分一人の世界、空想に耽つてみるこか、其際に惡癖を覺えるこか、或は仲間から離れて、別の仲間、例へば年斯く身體的缺陷を研究や事業によつて代償を得ようこするものはよいが、反對に精神的缺陷を身體的なもので補ふものはごんなものであらうか、勉强が出來ない青年は勉强を嫌ひ、其代りに運動に熱中して、其方面で頭角を現はさうこする者もある。人は何かの方面で秀でたいのであるから、健全な現れ方ならばよいが、問題になる場合も多い。

又特殊な能力で補償する事もある。例へば餘り一般的でないピンポンに上達して人を負かして喜ぶ樣なもので、斯かる場合にピンポンこ類似した處のテニス等もやりさうなものだが、斯かるものには絕對に手を出さず、唯勝味のあるピンポンしかしようこしない。其他特殊な趣味こか蒐集こかに熱中して、物識りや學者的氣持を滿足させようこするものもある。斯かる趣味に熱中する場合、本職の方もよくやつてをるのなら大變結構だが、本職の方で失敗したり、處を得ぬので、趣味の世界で代償を得てをるのは健全でないこも言へよう。

其他廻り遠い仕方で補償する場合もある。例へば親は子供を通して補償しようこする。即ち不遇の父親は子供が偉くなつてくれる事を人一倍期待し、又自分が達し得なかつた同じ職場で成功してくれる事を望んだりする。

其他補償作用に似たものこして同一視作用もある。即ち自分を仲間或は其他の人こ同一視する事によつて優越感を持たんこするもので、子供は先づ親こ自分を同一視し、親が偉いこ自分も偉いこ思つて得意になつたり、何かこ言ふこ親を持出して來る。其次には仲間を持つて來て、自分の組が勝てば自分も得意こなり、自分自身の劣つてをる事は忘れてしまつてをる。

自己中心性、劣等感を持つた子供は自分についての意識が强く、自分が世人より特に注意され、かまつてもらはれる事を要求する。他の人こ同じ樣に遇されてゐても、自分だけ無視されてをる樣に思ふ。又身體的に缺陷のある場合等親も特に可哀想になつて面倒をみる爲に一層自己中心的になり、自分に特に注意してくれるのは當然だこ思ふ樣になつてくる。斯かる場合思ふ樣に厚遇してくれない場合は、前述の如く特に冷遇されるゝ樣な被害妄想を持つたり、人をうらんだりする。又子供の場合無理に人(親)の注意を自分の方に惹く樣な行動をする事がある。例へば無理を言つて泣いて親の注意を惹かうこしたり、食事をわざこゝらなかつたり、不從順な事をする。斯かる行動をするこ突然叱られるが、彼にこつては無視されるより、叱られる方がましなのである。其他寢小便、指を吸ふこか、家出等が同じ理由で現れる事もある。斯かる場合には力めて無視して、

尙ほ、會期中、左の如き熱意の籠れる總意表明のあつたことは、何んたる心强いことであらう。此の表明は來會者中の、板橋ィヨ、利島勝進、吉富フキ、中根ゆた、岩井いこの、吉村喜久、田邊周の諸氏によつて起草せられ、その案文に對し、滿場一致同意せられたのであつた。

日本幼稚園協會保育講習會
參集者の總意表明

大東亞戰爭下に於て開催せられたる日本幼稚園協會保育講習會に全國及び海外より來集せる七百九拾一名の幼稚園關係者は時局の認識と感激と特に前線勇士に對する感謝とを以て愈〻この職域に精進し保育報國の實を擧げんことを期す

昭和十七年八月四日

日本幼稚園協會講習會々員一同